

要旨

「だろう」「かもしれない」の前に「の」が入ると話の真偽について話者がどの程度確信しているかの度合い(確信度)が変化することがある。「のだろう」「のかもしれない」について先行研究である田野村(1990)、野田(1997)は、「のだ」に「だろう」「かもしれない」が後接した形が「のだろう」「のかもしれない」であり、その意味は「のだ」の意味と「だろう」「かもしれない」の意味が合わさったものであるとしている。しかし、「の」による確信度の変化についてはほとんど触れられていない。本論文では、先行研究で触れられていなかった確信度の差について見ていった。また調べてみると、「だろう」「かもしれない」にも確信度と同じような違いもあることが分かった。本論文では、「の」による確信の度合いを確信度 A、「かもしれない」「だろう」による違いを確信度 B と呼び、それらが存在することを様々な例文を通して検証した。

カモシレナイとノカモシレナイ

言語学・応用言語学専攻

1LT03063T

平成 15 年入学

白石 卓也

平成 19 年 1 月提出

目次

1. はじめに	1
1.1. 「の」の有無による確信度の差	1
2. 先行研究	2
2.1. 田野村(1990)	2
2.1.1. 「のダ」の基本的意味・用法	2
2.1.2. 「のダ」の意味特性	3
2.1.3. 田野村(1990)と本論文との関わり	3
2.2. 野田(1997)	5
2.2.1. ムードの「のだ」	5
2.2.2. 野田(1997)と卒業論文テーマとの関わり	7
3. 本論文の主張	7
4. 前置き	8
4.1. 推量について	8
4.2. 時制	8
5. 検証	9
5.1. 過去のことに推量している文	9
5.1.1. 説明	10
5.1.2. 自然さに差が出ないケース	10
5.2. 一人称を主語にした文	12
5.2.1. 一人称を主語にしたときにおける自然さの違い	12
5.2.2. 説明	12
5.2.3. 「だろう」「のだろう」「のかもしれない」でも自然になるケース	13
5.3. 二人称を主語にした場合	14
5.3.1. 二人称を主語にした場合の分の自然さ	14
5.3.2. 説明	14
5.4. 三人称を主語にした場合	16
5.4.1. 三人称を主語にした場合の自然さ	16
5.4.2. 説明	16
5.5. 仮定をした上での推量	16
6. まとめ	17

1. はじめに

1.1. 「の」の有無による確信度の差

助動詞の前に「の」が入ると、話の真偽について話者がどの程度確信しているかの度合い(以下、確信度)が変化することがある。

- (1) a. 明日は、雨が降るかもしれない。
b. 明日は、雨が降るのかもしれない。
- (2) a. 明日は、雨が降るでしょう。
b. 明日は、雨が降るのでしょう。
- (3) a. 明日は、雨が降るだろう。
b. 明日は、雨が降るのだろう。

(1)~

(3)のいずれの場合も「の」が入っていないaに比べて、助動詞の前に「の」が入っているbの方が、確信度は下がる。

気象予報士や予言者の言葉では、以上で見えてきた「の」による確信度の差がはっきりと現れる。

- (4) a. 明日は全国的に晴れの天気となるでしょう。
b. 明日は全国的に晴れの天気となるのでしょう。
- (5) a. 空から恐怖の大王が降ってくるだろう。
b. 空から恐怖の大王が降ってくるのだろう。

どちらの文でも、bよりもaのほうが確信度は高い。だからこそ、bは(非文法的ではないが)気象予報士や予言者はあまり使わない構文であると思われる。

2章では、「のだ」について研究している、田野村(1990)、野田(1997)の中心的な主張を記し、それと本論文の観察との関係について述べる。

2.先行研究

2.1.田野村(1990)

2.1.1.「のダ」の基本的意味・用法

田野村(1990)は、「のダ」が用いられている文について以下のように述べている。

名詞を述語とする主題 解説型の文「～は～だ」の解説の位置(つまり、「～だ」の位置)に、述語を中心とする「雨が降った」という表現が現れたものである。ことばの形では表現されていないにせよ、「～は」という主題(例えば、「地面が濡れているのは」という主題)が常に潜んでいる。

(田野村(1990)、p.1)

そして田野村(1990)は、「のダ」の基本的な意味・機能は、あることがらを受けて、とはこういうことだ、の内実はこういうことだ、の背後にある事情はこういうことだ、といった気持ちで命題を提出するということであり、「のだ」は背後の事情を表すということができると述べている。(田野村(1990)、p.5)

たとえば

(6)では、きょうは休むということ()を受け、その背後にあるのは体調が悪いということ()だと述べているのだと、田野村(1990)はしている。

(6) きょうは休みます。体調が悪いんです。(田野村(1990)、p.5)

しかし、「のダ」が用いられても、

(7)のように、を特定しがたい場合もある。

(7) 血液型は何型ですか? - わたしは AB 型なんです。(田野村(1990)、p.6)

この種の「のダ」の用法について、田野村(1990)は以下のように述べている。

背後の事情を表す用法における、が、その内容の具体性を失ったものと考えられる。この種の「のだ」の用法においては、すべての者には必ずしも容易には知りえないにせよ、すでに定まっていると想定される事情が話し手の念頭に問題意識としてあり、それがである(かどうか)ということが問題とされている。

(田野村(1990)、p.7)

(7)では、話し手の血液型という個人的な事情が問題意識としてあり、それに応じる形で「AB型なんです」ということが問題とされていると、田野村(1990)は述べている。そして、田野村(1990)は、この種の用法の場合、「のダ」は「実情」を表しているのだ、と表現している。

2.1.2.「のダ」の意味特性

田野村(1990)は、「背後の事情」や「実情」を表すということから「のダ」は承前性、既定性、披瀝性、特立性という、4つの意味特性を示すことがあるとしている。以下に記した内容は、田野村(1990)の pp.8-13 を要約したものである。

承前性とは、次のようなことである。「のダ」を含む表現は、言語的な文脈に現れたことがらや会話の状況中の非言語的なことがらを受けた上で発せられることが多い。これは、問題の発端となるべき事柄があって初めて、「背後の事情」が問題となってくるためである。

既定性とは次のようなことである。「のダ」のは、すでに定まったことがらであることが多い。これは、が既定のことがらであれば、その背後の事情であるが既定であるのは当然であるためである。

披瀝性とは次のようなことである。「のダ」のはすべてのものには知りたい種類のことがらである。これは、「のダ」が、文脈上すでに認められたことがらを受けて、その背後に潜んでいる事情を問題としたり、「私の内心は～」や「あなたの個人的な事情は～」といった問題意識を受けて、その実情を表現したりするからである。この性質は私が1章で述べた確信度の原因となっているものであるかもしれない。

特立性とは次のようなことである。「のダ」は一つの可能性をほかの可能性から区別して問題とする場合に特徴的に使用される。これは、ことがらがすでに分かっている状況で、それはどういうことかということであると表現するということは、裏を返せば、であって「や」ではないということを含意しようということになるからである。

2.1.3.田野村(1990)と本論文との関わり

田野村(1990)は「だろう」「でしょう」について考察し、「だろう」の用法を3つに分類している(田野村(1990)、pp.70-81)。1つ目は、

(8)のように話し手の推量を表す単純推量の「だろう」である。2つ目は、(9)のように話し手の推量を表明しながらも、その推量が正しいことの確認を聞き手に求めている推量確認要求の「だろう」である。3つ目は、(10)のように聞き手にその事実の確認を求めたり、聞き手の注意をその事実に向けさせる事実確認要求の「だろう」である。

- (8) 雨が降るだろう。(田野村(1990)、p.70)
 (9) 疲れているんでしょう。(モウ寝ナサイ。)(田野村(1990)、p.71)
 (10) 駅や地下街によくいるだろう、ああいう男が。(田野村(1990)、p.71)

田野村(1990)は「のだろう」は、「のダ」と「だろう」が組み合わされたものであり、あることがらの背後の事情がであることや、問題の実情がであることを、推量して述べたり、推量や事実についての確認を聞き手に求めたりするのに用いられる、としている。

まず、単純推量の「だろう」についての田野村(1990)の考え方を記す。

(11)は、雨が降るかどうかということ事態を推量して述べるものであるのに対し、(12)では、雨が降るとすることは、直接に推量されているのではなく、空が暗いという事実の背後の事情として推量されている、と田野村(1990)はしている。

- (11) (空がずいぶん暗い。これだと)今夜あたり雨が降るだろう。
 (12) (空がずいぶん暗い。これは)今夜あたり明日は雨が降るんだろう。
 (田野村(1990)、p72)

私は、気象予報士が(4b)のようにには言わず、(4a)のようにしか言わないのは、確信度の差が原因であるとした。一方で、田野村(1990)では、天気予報が観測事実の背後にどのような事情があるかを解説するものではなく、観測事実から引き出される予測そのものを告知するものと考えられているから、「のだろう」が使われないとしている。

単純推量「のだろう」では、「のダ」の披瀝性から、話し手にも聞き手にも容易には知りえないことがらが表現されていることが多いとしている。また、単純推量「のだろう」は、ある事柄の背後の事情を探る形での推量を表すものであるため、は話し手にとって確かな知識であってはならないとしている。「だろう」に比べて「のだろう」の方が、確信度が低いという私の考えは、2.2 で述べたようにこれらの性質が原因であると考えられることもできる。

推量確認要求の「だろう」は、聞き手の内心や個人的な事情を表現する機会が多いため、「のダ」の披瀝性が現れる「のだろう」となることが多いと、田野村(1990)はしている。これは、披瀝性を確信度と置き換えれば、推量確認要求の「だろう」は、話者がはっきりと確信することができない、聞き手の内心や個人的な事情を表現する機会が多いため、確信度の低い「のだろう」となることが多い、と言うことができる。

事実確認要求の「だろう」は、どちらかといえば、「のダ」を伴わないことが多いが、

あることがらの背後の事情や既定の実情を述べるような場合には、「のだろう」の形になると田野村(1990)は述べている。しかし、これは確信度によっても説明することもできる。つまり、事実確認要求の「だろう」は話者が確信している事実を聞き手に確認を求めたり、聞き手の注意をその事実に向けさせる用法であるから、確信度が低くなる「のだろう」の形ではあまり出てこない、と言うことができるのである。

以上で単純推量、推量確認要求、事実確認要求という田野村(1990)の挙げた3つの「だろう」の用法に絡む現象が、確信度でも説明できることを示した。しかし、筆者と田野村(1990)のどちらでも上に挙げた現象は説明できるため、どちらの主張が正しいかの判断をすることはできない。

2.2.野田(1997)

野田(1997)は、「(の)だ」は名詞化の機能を持つ準体助詞の「の」に「だ」が後接し、それが一語化したものである、と述べている(野田(1997)、p12)。準体助詞とは、「他の語に附いて或意味を加へて、全體として體言と同じ職能を持つたものを作る」(橋本(1934))ものである。佐治(1969)¹は、準体助詞の「の」を次の3つに分けている。

格助詞(下の体言の省略)：私のは机の上にあります。

準代名詞：私買ったのは辞書です。

狭義の準体助詞：私辞書を買ったのを知っていますか。

野田(1997)では、「のだ」は狭義の準体助詞の「の」に「だ」がついたものであるとし、「のだ」を大きく分けてスコープの「(の)だ」とムードの「のだ」とに分けて考えている。「のだろう」は、この2つのうちのムードの「のだ」に「だろう」が後接したものであると考えている。そのため、次節ではムードの「のだ」について見る。

2.2.1.ムードの「のだ」

野田(1997)は、ムードの「のだ」の本質は、文を名詞文に準じる形にすることによって、話し手の心的態度を表すということであるとしている(野田(1997)、p.66)。そして、ムードの「のだ」の本質ではないが、重要な性質として「前接する部分Qで示される内容を、話し手が既定の事態として捉える」というものもあげている(野田(1997)、p62)。これは、名詞化するということが、「話し手の主観からはなれたところで成立していることがらとして提出する」(佐治(1986b))ことだからだと、野田(1997)は考えている。

(13)は「(山田さんは)用事がある」ということが、すでに定まった事態として示されているから自然で、(14)は話し手の発話時の意思をそのまま述べており、Qが既定の事態で

¹ 佐治(1969)に関する部分は野田(1997)からの引用であり、筆者は未読である。

ないために不自然になっていると、野田(1997)は考えている。

- (13) 山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。
(14)* どうしよう……。うん、やっぱり行くんだ。(野田(1997)、p.64)

ムードには、事態に対する話し手の心的態度を表す「対事的ムード」の形式と、発話の聞き手に対する話し手の心的態度を表す「対人的ムード」の形式とがある、と野田(1997)は述べ(野田(1997)、p.22)、ムードの「のだ」は、対事的ムードのみを担うか、対人的ムードも担うかという軸で分類することができる(野田(1997)、p.67)。上の

- (13)は対事的ムードの「のだ」、下の
(15)は対人的ムードの「のだ」である。

- (15) 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。(野田(1997)、p.64)

また、事態 Q を先行文脈 P と関係づけているか、いないか、という軸でも分類することができるため、ムードの「のだ」は、計 4 つに分類されると、野田(1997)はしている。(野田(1997)、p.73)上の(14)、

- (15)は、関係づけのムードの「のだ」、下の
(16)は非関係づけのムードの「のだ」である。

- (16) そうか、このスイッチを押すんだ。(野田(1997)、p.64)

野田(1997)では「のだらう」の「のだ」は対事的ムードの「のだ」であるとしているため、以下では対事的ムードの「のだ」について見ていく。

対事的ムードの「のだ」は、話し手が認識していなかった既定の事態 Q を発話時において把握したことを示すものである、と野田(1997)は述べている(野田(1997)、p.80)。

- (17)は、「雨が降っている」という既定の事態をそのまま述べているが、対事的ムードの「のだ」を用いた(18)では、気づく前からすでに「雨が降っている」という事態が存在していたと話し手が捕らえていることが示される、と野田(1997)はしている。

- (17) あ、雨が降ってる。
(18) あ、雨が降ってるんだ。(野田(1997)、p.81)

関係づけの対事的ムードの「のだ」は、状況や先行文脈 P の事情、意味を自分にとって分かりやすい Q として把握したときに用いられると、野田(1997)は述べている(野田(1997)、

p.86)。以下の文では、P「駅の周囲がとたんで囲まれていて、その中にクレーンが見える。」という状況から、その状況を成立させた事情として、Q「駅を建て直す」を導き出している、と野田(1997)はしている(野田(1997)、p.84)。

- (19) タクシーの窓からちらりと横を見た向かいは、駅の周囲がとたんで囲まれていることに気づいた。張り巡らされた鉄板の向こう側に鎌首をもたげた黄色いクレーン車の先端が見える。 - 駅を建て直すんだ。(野田(1997)、p.84)

非関係づけの対事的ムードの「のだ」は、話し手が Q を、認識していなかった既定の事態として把握した場合に用いられる、と野田(1997)は述べている(野田(1997)、p.89)。(20)は、「このスイッチを押す」ということをとるべき行動として定まっていたものとして把握しており、「のだ」を用いないと不自然である、と野田(1997)は述べている。

- (20) そうかこのスイッチを押すんだ。(野田(1997)、p.89)

2.2.2.野田(1997)と卒業論文テーマとの関わり

野田(1997)では、「のだらう」を対事的ムードの「のだ」+ 概念の助動詞「だらう」だとし、「のにちがいない」「のかもしれない」も同様であるとしている(野田(1990)、p.212)。そして、「だらう」等は特に根拠を示さずに話し手の判断を述べることができる形式であるのに対し、「のだらう」等は状況と判断との関係を示すために用いられる形式であるとしている。

このことから考えると、「のだらう」は判断の根拠を示しているため、「だらう」よりも確信度が高くなるほうが、自然なように思える。これは、「のだらう」より「だらう」の方が確信度が高い、という私の観察と矛盾している。また、対事的ムード「Qのだ」の Q は既定の事態であり、「のだらう」が対事的ムードの「のだ」と「だらう」が合わさった形であるということも、「だらう」の方が「のだらう」よりも確信度が低いということを示唆している。

3.本論文の主張

本論文の主張は 2 つである。

1 つ目は、1 章でも述べたことだが、「かもしれない」や「だらう」に「の」が入ると確信度が下がると言うことである。

2 つ目は、「かもしれない」と「だらう」とを比べると、「だらう」を使った時の方が、推量している内容が起こる可能性が高いと話者は感じているということである。これは、

1つ目に挙げた確信度と似ているが、両者は違うものなので、分けて考えなければならぬ。本論文では「の」によって現れる確信度を確信度 A と呼び、「かもしれない」「だろう」によって現れるものを確信度 B と呼ぶことにする。

確信度 B は、普通の「だろう」「かもしれない」を入れ替えた文を比べるだけでも感じとして分かるが、以下の文のように二律背反のことを同時に推量している文でははっきりとした違いとして現れる。

(21) 明日は雨が降るかもしれないし、降らないかもしれない。

(22) *明日は雨が降るだろうし、降らないだろう。

「かもしれない」を使った

(21)は自然であるが、「だろう」を使っている(22)は不自然である。

上で述べたように確信度 A と確信度 B は同じではない。もし同じであるとするならば、「だろう」に比べて確信度が下がる「のだろう」を使っている

(23)は、「かもしれない」を使っている

(21)と同様に自然になるはずである。しかし、

(23)は(22)と同様に不自然になるので、確信度 A と確信度 B は同じであるとは考えられない。

(23) *明日は雨が降るのだろうし、降らないのだろう。

以下の章では様々な例文を見ていき、本論文の主張の妥当性を検証する。

4.前置き

検証に移る前に、推量とはどういうものであるかという点と、時制が変わるとどこが変わるかと言う点について述べておく。ここで述べる内容は検証に関わってくるものである。

4.1.推量について

まず推量とはどういうことであるかについて述べておく。推量する事柄については以下のような事が言える。それは、「だろう」「かもしれない」で推量する事柄は、推量している者が推量している時点では知らない内容であって、知っている内容であってはならないということである。もし、「だろう」や「かもしれない」で表現する事柄を知っているのであれば、それはもはや推量ではないからである。例えば、以下のような例文では、話者は「明日雨が降る」ということを知らない。

(24) 明日は雨が降るだろう。

もし、「明日雨が降る」と言う事柄を話者が知っているのであれば、例えば以下のように表現するだろう。

(25) 明日は雨が降るよ。

4.2.時制

本論文では、過去のことを推量している文と、未来のことを推量している文を見ていくので、ここではこの2つの時制のことについて述べる。両者の違いは、未来のことは不確定であるのに対し、過去のことは確定しているということである。例えば、(26)は雨が降ったかどうかを話者は知らないが、昨日雨が降ったか降らなかったかは確定している事柄である。それに対し(27)は明日雨が降るのか降らないのかはまだ確定していない事柄である。

(26) 昨日は雨が降ったのだろう。

(27) 明日は雨が降るのだろう。

5.検証

第1節では、過去のことに推量している文について見る。第2～4節では、一人称、二人称、三人称を主語にしている文についてそれぞれ見る。第5節では仮定をした上で推量している文について見る。

5.1.過去のことに推量している文

(28)の「明日」を「昨日」にすると、文の自然さが変化する。

(28) a. 明日は雨が降るかもしれない。

b. 明日は雨が降るのかもしれない。

(29) a. 昨日は雨が降ったかもしれない。

b. 昨日は雨が降ったのかもしれない。

(28a,b)は自然な文である。

(29a,b)はそのままでは、不自然に感じられるが、以下のような前文を加えると自然になる。

- (30) A「地面が濡れてるなあ。」
B「昨日、雨が降った(の)かもしれないね。」

(30)では、確信度の違いははっきりしないが、「かもしれない」よりも「のかもしれない」の方が自然なように思われる。

同様に「だろう」についても考えてみる。

- (31) a. 明日は雨が降るだろう。
b. 明日は雨が降るのだろう。

- (32) a. 昨日は雨が降っただろう。
b. 昨日は雨が降ったのだろう。

(32a,b)も、そのままの形では、不自然に感じられる。そこで、「かもしれない」と同様の前文を加えてみる。

- (33) A「地面が濡れてるなあ。」
B「昨日、雨が降った(の)だろうね。」

(33)も確信度の違いははっきりしないが、「かもしれない」と同様に、「だろう」よりも「のだろう」にしたほうが自然に感じられ、「昨日、雨が降っただろう」は非常に不自然に感じられる。

5.1.1.説明

過去の出来事を推量する場合、「のかもしれない」「のだろう」は自然になり、「だろう」は不自然になることが分かった。これは次のように考えることができる。過去のことは4章で述べたように確定していることである。ゆえに、確信度Aも確信度Bも高い「だろう」を使ってしまうと、推量している者が推量している内容を知っているような感じが

与えてしまう。しかし、推量している内容は知っている内容であってはならない。そのため、「だろう」を使った文は不自然になる。

また過去の出来事を推量する場合、「のかもしれない」の方が、「かもしれない」より自然に感じるということも分かったが、これが何故なのかは今後の課題としたい。

5.1.2.自然さに差が出ないケース

過去の出来事を推量する場合、「のかもしれない」で表現した方が「かもしれない」より自然になると述べた。しかし、以下の例文のように、「の」が入っている文もいない文も自然さに差が現れない文もある。

- (34) a. 気持ち悪い。ちょっと、飲みすぎちゃったかもしれない。
b. 私、彼を怒らせちゃったかもしれない。

(34a,b)は「ちゃった」を「かもしれない」の前に入れた文である。この場合、「の」が入っている文もいない文もどちらも同様に自然であり、

(34a)に関して言えばむしろ「の」がない方が自然に感じる。確信度は、「かもしれない」の方が「のかもしれない」より高い。

この原因が何であるかは確かには分からないが、

(34a,b)のような表現は話者が推量する場面にいたことが原因ではないかと私は考える。例えば、前節で取り上げた、「雨が降った(の)かもしれない」「雨が降った(の)だろう」では話者は雨が降っている現場にはいなかった。それに対して例えば

(34a)では、飲みすぎたかどうかは話者は知らないが、「飲みすぎたかもしれない」場面にはいたということが伝わってくる。

(34b)も同様である。つまり、この節の例文と、前節の例文とは状況が違うために、「の」による自然さの違いがないのではないかと思うのである。

また、「の」が入っていない「だろう」で過去のことを推量すると不自然になると述べたが、田野村(1990)の単純推量の「だろう」ではないが、推量確認要求や事実確認要求の「だろう」を使った、以下のような文では「の」が入ってなくても自然である。

- (35) a. お前、昨日家にいなかっただろう。
b. 子供のころ、近所に人の良いおじさんがいただろう。
c. それ見ろ。俺の言ったとおり、昨日雨が降っただろう。

これらは、「の」が入っていない「だろう」だと実際に話者が「聞き手が家にいなかった

こと」や「人の良いおじさんがいたこと」「雨が降ったこと」を見て知っているような印象を受けるが、「のだろう」にすると人に聞いて知り自分では現場を見ていないような印象になる。そのため、「のだろう」は「だろう」よりも確信度は低くなっている。

なお、仮定をした上で過去のことを推量をする場合も、「かもしれない」でも単純推量の「だろう」でも「の」が入っている文としない文で自然さに違いは出ない。

- (36) a. 彼がいなかったら、あの子犬は死んでいたかもしれない。
b. あれに失敗していたら、私は路頭に迷っていたかもしれない。
c. 彼がいたら、こんなに苦労しなかっただろう。
d. もし信長が生きていたら、天下統一を成し遂げただろう。

(36a-d)はそれぞれ仮定をした上で推量している文である。この場合も、「の」が入っている文もいない文も同様に自然である。確信度は「かもしれない」の方が「のかもしれない」よりも高い。これも「かもしれない」の時と同じように「の」があってもなくても自然で、「だろう」の方が「のだろう」よりも確信度は高い。

仮定をした上で推量する表現は先に挙げた例文と違って、話者が推量する場面にいたりしてはいない。よって、違う説明が必要となるが、これに関しては本章の第5節で私の考えを述べる。

5.2.一人称を主語にした文

第2～4節では、人を主語にした場合の例文についての考察を行う。この第2節では話者（以下では一人称と呼ぶ）、第3節では聞き手（以下では二人称と呼ぶ）、第4節ではそれ以外の人（以下では三人称と呼ぶ）、という3つのタイプを主語にした例文を見ていく。

5.2.1.一人称を主語にしたときにおける自然さの違い

まずは「だろう」について考える。

- (37) a. (私は)明日、友達と遊びに行くだろう。
b. (私は)明日、友達と遊びに行くのだろう。

(37a)も

(37b)も、田野村(1990)の単純推量の「だろう」が会話で使われたものだと考えると、とも

に不自然である。

次に「かもしれない」について考える。

- (38) a. (私は)明日、友達と遊びに行くかもしれない。
b. (私は)明日、友達と遊びに行くのかもしれない。

(38a)は、「だろう」と違い、会話の際に使われるものと考えても自然である。それに対して、

(38b)は会話の際に使われる文として考えると、不自然に感じる。

5.2.2.説明

一人称が主語の時、「かもしれない」だけが自然で、「だろう」「のだろう」「のかもしれない」では不自然になると言うことが分かった。これは次のように考えることができる。

一人称が主語である場合、推量する内容は話者の意思でコントロールできるものである。そのため、確信度A、確信度Bともに高い、「だろう」を使うと推量する内容を知っているような感じを与えてしまう。しかし、推量している内容は知っている内容であってはならない。そのため、「だろう」を使った文は不自然になる。

また、話者がコントロールできる内容というものは、コントロールできないものと比べて、話者にとってははっきりしているものである。それゆえ、確信度Aが低い「のかもしれない」「のだろう」では不自然になると考えられる。

5.2.3.「だろう」「のだろう」「のかもしれない」でも自然になるケース

先ほど、一人称が主語で、「だろう」「のだろう」を使った文は不自然になると述べた。しかし、以下のように自然になることがある。

- (39) a. 俺はあいつに殺されるだろう。
b. 俺はあいつに殺されるのだろう。

(40) a. 私はこの病気で死ぬだろう。
b. 私はこの病気で死ぬのだろう。

(39)、

(40)で「だろう」「のだろう」でも自然になるのは、話者のコントロールできない文であり、先ほど挙げたものと違うタイプの文だからだと思われる。

また、独り言として発言されたものであると考えれば、先ほど挙げた例文でも「だろう」「のだろう」で自然になる。

- (41) a. (私は)明日、友達と遊びに行くだろう。
b. (私は)明日、友達と遊びに行くのだろう。

この場合、「だろう」の

(41a)も、「のだろう」の

(41b)も自然になる。この用法の「だろう」「のだろう」は、自分のことを他人事のような気持ちで発言しているように感じる。つまり、推量している内容を話者のコントロールできることとして扱っていない。それゆえ、先ほど挙げたものと違って自然に成るのではないと思われる。

主語が一人称であっても話者がコントロールできない内容であれば、自然になると述べた。しかし、話者がコントロールできる内容であっても「だろう」で表せるものもある。

- (42) 私はもう二度とそこには行かないだろう。

これは、「だろう」では自然であるが、「のだろう」にすると他人事のように話しているように感じる。この文でなぜ「だろう」で表現しても自然になるのかは今のところ分からない。

上では「だろう」「のだろう」で自然になる場合について述べたが、「のかもしれない」でも同様に自然になる場合がある。「だろう」の時と同じように、独り言として発言されたものとして考えると、「かもしれない」の「のかもしれない」のもとに自然になる。

- (43) a. (私は)明日、友達と遊びに行くかもしれない。
b. (私は)明日、友達と遊びに行くのかもしれない。

「のかもしれない」の

(43b)は「のだろう」と同様に、自分のことなのに他人事のように発言しているように感じられ、

(43b)に比べ確信度は下がる。これらの「かもしれない」「のかもしれない」の違いも、単純推量の「だろう」について説明した時の考え方で説明できる。

5.3.二人称を主語にした場合

5.3.1.二人称を主語にした場合の分の自然さ

まずは「だろう」について考える。

- (44) a. 君は明日、友達と遊びに行くだろう。
b. 君は明日、友達と遊びに行くのだろう。

(44a,b)は「雨が降るだろう」と同じ、田野村(1990)の単純推量として見ると、不自然である。

次に「かもしれない」について考える。

- (45) a. 君は明日、友達と遊びに行くかもしれない。
b. 君は明日、友達と遊びに行くのかもしれない。

(45a,b)は、ともに不自然に感じられる。

5.3.2.説明

聞き手を主語にすると「だろう」「のだろう」「かもしれない」「のかもしれない」のどれで表現しても不自然になることが分かった。これが何故かは分からないが、聞き手の意思でコントロール可能なことを推量する場合はこのようなことが起こるようである。

その証拠に、以下のように「死ぬ」という聞き手の意思でコントロールすることのできない内容を推量する場合は「だろう」「のだろう」「かもしれない」「のかもしれない」のいずれでも自然になる。

- (46) a. 君は明日死ぬだろう。
b. 君は明日死ぬのだろう。

- (47) a. 君は明日死ぬかもしれない。
b. 君は明日死ぬのかもしれない。

また、「だろう」「のだろう」について言えば、単純推量ではなく推量確認用法の「だろう」としてとらえるのであれば、自然になる。

- (48) a. 君は明日、友達と遊びに行くだろう。
b. 君は明日、友達と遊びに行くのだろう。

この場合、

(48a,b)はともに自然ではある。確信度についていえば、「だろう」の(48a)の方が「のだろう」の(48b)よりも高い。

また、以下のように「かもしれない」「のかもしれない」の後に「んだよね」をつけると、自然になる。

- (49) a. 君は明日、友達と遊びに行くかもしれないんだよね。
b. 君は明日、友達と遊びに行くのかもしれないんだよね。

この表現の場合は、「かもしれない」の

(49a)の方が「のかもしれない」の

(49b)よりも確信度は高い。しかし、この場合の確信度は話者の確信度ではなく、聞き手の確信度である。

確信度が話者のものではなく、聞き手の確信度になるという現象は、「かもしれない」の後に「と言っていた」という表現をつけても起こる。

- (50) a. 君は明日、友達と遊びに行くかもしれないと言っていたよね。
b. 君は明日、友達と遊びに行くのかもしれないと言っていたよね。

同じことが、聞き手を主語にしない場合しない場合、また「かもしれない」ではなく、「だろう」を使った場合でもおこる。

- (51) a. 彼は、明日は雨が降るかもしれない、と言っていた。
b. 彼は、明日は雨が降るのかもしれない、と言っていた。

- (52) a. 彼は、明日は雨が降るだろう、と言っていた。
b. 彼は、明日は雨が降るのだろう、と言っていた。

(51)、

(52)での確信度は「彼」の確信度である。これらのから考えて、確信度というものは、話者ではなく、推量を行っているものに依拠するものだと考えられる。

5.4.三人称を主語にした場合

5.4.1.三人称を主語にした場合の自然さ

これは、人以外のものを主語にした場合と同じである。

- (53) a. 太郎は、明日は友達と遊びに行くだろう。
b. 太郎は、明日は友達と遊びに行くのだろう。

- (54) a. 太郎は、明日は友達と遊びに行くかもしれない。
b. 太郎は、明日は友達と遊びに行くのかもしれない。

(53a)、

(54a)はそれぞれ、

(53b)、

(54b)よりも確信度が高い。

5.4.2.説明

三人称を主語にした場合、一人称や二人称を主語にしたときと違い、「だろう」「のだろう」「かもしれない」「のかもしれない」のすべてで自然になることが分かった。これは、三人称が主語の場合、推量する内容は、話者、聞き手のどちらの意思でもコントロールできないことであるためだと思われる。

5.5.仮定をした上での推量

本章の第1節で過去のことを「だろう」で推量した時、会話文で使われている単純推量と考えたら、不自然になると述べた。しかし、第1節で述べたように仮定をした上で推量するのであれば、自然となる。

(55) 昨日は大雨が降っただろう。

(56) もし台風が来ていたら、昨日は大雨が降っていただろう。

(55)は不自然であるのに対し、(56)は自然である。このようになる原因は、過去のことを仮

定した上で推量するという事は、実際に起こった過去の出来事を推量することではなく、仮定の世界において物事を推量することであるためだと思われる。(56)の場合だと、現実の世界では、実際には大雨は降っておらず、この推量は台風が来ていた場合の推量であって、(55)の推量の対象とはことなっているのである。つまり、(56)は、過去形を取っているが実際には過去の推量ではないのである。

6.まとめ

「かもしれない」「だろう」に「の」が入ると確信度 A が下がる。「かもしれない」より「だろう」の方が確信度 B は高い。これで説明がつかないのは、二人称が主語になる場合、「かもしれない」「のかもしれない」「だろう」「のだろう」で表現できないと言うことと、過去のことを表現する場合「のかもしれない」の方が「かもしれない」より自然になるということの二つである。後のケースは例外を除けば、これで説明できる。

参考文献

- 佐治 圭三(1991)『日本語の文法の研究』 ひつじ書房。
田野村 忠温(1990)『現代日本語の文法 「のだ」の意味と用法』 和泉選書。
野田 春美(1997)『「の(だ)」の機能』 くろしお出版。
橋本 進吉(1934)『国語法要説』 明治書院(『国語法研究』岩波書店 1948 所収)。